

林鶴一が漱石の『坊っちゃん』に登場する「山嵐」のモデルである可能性について

河野 敬雄

e-mail: kono.norio.58x@st.kyoto-u.ac.jp

1 漱石の小説に登場する人物のモデルについて

漱石は自身の小説について特定のモデルはいない、と強く否定している（森田 [20], 352頁-353頁）が、参考ないしヒントを得たという意味のモデルまでも否定しているわけではないと思われる。たとえば、夏目鏡子の「漱石の思い出」([21], 312頁上段)には、「吾輩は猫である」中の愛嬌者多々羅三平だと噂されている股野義郎さんです」とあるように¹、特にこの作品は実生活で鏡子夫人が体験している身近な出来事を題材にしており種々思い当たることはあるうようだ。一方、『坊っちゃん』に関しては漱石自身の松山中学校時代の体験に基づいていることに疑いはないが彼が鏡子夫人と結婚する以前の出来事なので彼女の「思い出」からは何もヒントになることを見つけることはできなかった。

以下本稿では、小説『坊っちゃん』の主人公である「坊っちゃん」と彼の同僚で重要な脇役として描かれている「山嵐」（本名、堀田）について、漱石が参考ないしヒントあるいはインスパイアされたのではないかと推測される人物（以下「モデル」と括弧付きで表記する）について若干の考察を試みる。

1.1 小説における「モデル」とは

まず最初に確認しておくべきことは「モデル小説」、あるいはある小説における「モデル」とは何を意味するのか、ということである。

以下、本稿では小説の「モデル」について次のように分類する。

I 類: いわゆるモデル小説の主要な登場人物で、特定のある実在する人物を指していることが、実名であるか架空の名前であるかを問わず、読み手にとって明白な場合である。

II 類 ある実在の人物（原則一人）のいくつかの属性、キャラクターに着目、インスパイアされて作者が創作した作中人物に対して当該人物をII類の「モデル」という。

III 類 作者が作中の人物を描くにあたって、作者の知己、友人、その他特定の人物について、その風貌、行動様式、逸話、学歴等の作者が知り得ている知識を小説に反映さ

¹実際、秦 ([5], 198頁-200頁)によると、「(彼が漱石に) 珍しくモデル問題で苦情を申したため、はからずも後世にモデルは俣野義郎なりと暴露する証拠を残してしまった」とあり、顛末をかなり詳細に紹介している。

せている場合、参照された知己、友人、その他特定の人物については、作者にとって小説の「単なる材料提供者」であって、モデルとは言い難いが、便宜上、本稿ではIII類の「モデル」、ということにする。当然、一人の登場人物に対して複数の「モデル」が存在し得る。この場合、読者はあれこれ登場人物の「モデル探し」をする傾向がある。従って、複数のモデル候補についての議論が熱心にかつ盛んに行われる。その典型的例が漱石の『坊っちゃん』に登場する人物達である。

I類の「モデル」の場合、当該人物から名誉棄損あるいはプライバシーの侵害等で裁判沙汰になるケースがある。たとえば、三島由紀夫の『宴のあと』、柳美里『石に泳ぐ魚』等が知られている。しかし、II類あるいはIII類の「モデル」であっても世間的に話題になり「モデル」とされた人物に負の影響が及んだ場合はやはりトラブルに発展する可能性がある。前述(前頁脚注)の漱石の「猫」における俣野氏の例がそうである。

この「モデル」問題についてはすでに木村毅が縷々論じている([9]、「文壇モデル考」,23頁-65頁)。彼によると小説の題材として実在人物をモデルというのは明治末に出来た和製英語であるらしい(同25頁)。彼は「作中人物が実在人物と想像のつくようには書いてあっても、実は新聞や世間話位で聞き知った粗笨な外輪を描き得たに止まる」場合と「単なる事件や行為の外輪のみでなく、性格的実在性を多少とも伝えて」いる場合に分け、後者の場合は直接その人物を観察したものでなければ描き得ない多少の特殊性がある(同28頁)」と述べて、いくつもの例を挙げて論じている。しかし、彼の分類は本稿のそれとは少々視点が異なる。彼のモデル論には、本稿の分類でいうII類の「モデル」とIII類のそれとの区別がない。III類の「モデル」の場合は只単に作中人物にリアリティを持たせるための材料を提供しているに過ぎないことを忘れてはならない。

彼はまた同書31頁において、『書生気質』の著者坪内博士がモデルについて漏らされた言葉を紹介している。曰く「モデルはある程度まで有る。三人を集めて一人にしたり、二人を一人にしたりしたのもある」と。この「モデル」が本稿でいうII類の「モデル」かIII類のそれかは判別しかねるが、兎に角作者自身がII類ないしIII類の「モデル」の存在を認めていることは確かである。

例えば、尾崎譲の『低き声にて語れ一元老院議官 神田孝平』([25])は実在した神田孝平を主人公とする小説であるが、フィクションの部分と史実と思われる部分がはっきりと書き分けられており、神田孝平について研究する場合にも参考になる。小説であるから、「モデル」という意味では神田孝平がI類の「モデル」ということになる。

I類のモデル小説の場合、「モデル」となった人物の全生涯を対象にする必要は必ずしもないが、実名で登場させる場合は特に史実に明らかに反することやあまりにも客観性に欠ける主観的評価、特にネガティブな評価はやはり少々問題である。このことに関して河西([8],216頁-217頁)は、隈本有尚をI類の「モデル」とした松本清張の「モデル小説」、『小説東京帝国大学』の隈本有尚に関する記述に対して「こうした捏造は物書きとして最も恥ずべきことであろう」と苦言を呈している。しかしながら、彼自身もその誤りを犯しているのではないだろうか。

何れにしろ、本稿の意味の「モデル」の類型をきちんと押さえて議論する必要がある。例えば秦([5],24頁)のように「(「坊っちゃん」は)江戸っ子という出自と気分は作

者の漱石と共通するが、物理学校卒と帝国大学の文学士だった学歴がまるでちがうから、漱石はモデルの本命とは言いがたい」としているが、I類の「モデル」ならともかく、II類の「モデル」としてなら、学歴や教科の違いなど作者の創作によってどうにでもなるレベルの話である。

尤も、近藤(英)([14],173頁)がいうように「考えてみれば、小説の登場人物は、本質的には作者の頭の中で作られた仮空のものであって、書かれたことが、いちいちモデルにあてはまるわけではない」のだからムキになって議論するような話ではないが、噺の種としてはアリだろう。他方、景浦([7],343頁)がいうように「要するに、小説坊っちゃんの如き文芸上の作品に対して真事実の有無やモデルの如何を検討して、其の適否を論じたり真事実に合致しない事を責めたりするのは、没常識、没意義である」とまで断じてしまうのも少々味気ない気がする。

漱石の『坊っちゃん』についていうと、曾我([27],8頁)は「創作“坊っちゃん”は、元来寫實小説でもなければ傳記小説でもない。いはゆるモデル小説でないで、そのモデルを詮索するのは、いさゝかよけいのことのやうである。それにもかゝらず、“坊っちゃん”の興味もしくは人気の一部といふものは、やはりそのモデルに關係をもつてゐる」と述べているから、本稿においても「坊っちゃん」と、特に「山嵐」に焦点をあてて彼等の「モデル」について若干の私見を述べてみるのも無意味なことではないだろう。

1.2 本稿の問題意識

従来から指摘されている「坊っちゃん」と「山嵐」の「モデル」は、漱石の松山中学時代の同僚の弘中又一(1873-1938)と渡部政和である。特に渡部「山嵐モデル」説は通説となっている感がある。その他、「山嵐」の出身地、会津と関係のある柔道家西郷四郎を「山嵐」の「モデル」とする説(近藤(哲)[16])および漱石の成立学舎と大学予備門における恩師にあたる隈本有尚(くまもとありたか, 1860-1943)を「山嵐」の「モデル」とする説(河西[8])が知られている。しかし、これらの「モデル」はいずれも、以下本稿で縷々論じるように、精々本稿でいうIII類の「モデル」であると思われる。

一方、東北帝国大学の初代数学教授としてよく知られている林鶴一は、実は京都帝国大学初代の専任助教授として着任しながら僅か8カ月足らずで依願退職して浪人、2カ月後に知人の紹介で遥かに格下の松山中学校に嘱託として赴任²、2年程在籍している([34])。漱石が熊本の第五高等学校の教授時代のことで彼等に直接の接点はない。しかし、次節で種々検討・考察するように松山中学校時代の林は「山嵐」を彷彿とさせるようなキャラクターの持ち主だった可能性があり、かつ、間接的にしろ漱石は彼の経歴を含めてそのことを知り得たと思われるのである。つまり、林は本稿でいうII類の意味で「山嵐」の「モデル」となり得るということである。このことを可能な限り文献に添って検証することが本稿の目的である。

²小倉([24],52頁)、安倍([3],200頁)。なお、[34]では彼の経歴欄に「1899/6 松山中学校講師」とあるが、秦([5],48頁-49頁)による当時の教職員名簿に「嘱託」という職位はあるが、「講師」という職位の教員は載っていない。

2 先行研究—批判的紹介

小説『坊っちゃん』に登場する数学教師「坊っちゃん」あるいは数学教師「山嵐」(堀田)のモデルではないかと言われている人物としては前述したように、会津出身の柔道家西郷四郎、進学塾である成立学舎と大学予備門において漱石を教えたことのある恩師にあたる隈本有尚、漱石の松山中学校時代の同僚の数学教師だった弘中又一および渡部政和等である。

2.1 「坊っちゃん」の「モデル」について

2.1-1) 熊谷市立江南文化財センターがweb上で公開している熊谷デジタルミュージアム ([35], [36]) では弘中又一を「坊っちゃん」の本稿でいうI類のモデルであるかのごとくに紹介している。しかしながら「坊っちゃん」が数学教師であり、漱石の松山中学校時代の同僚の数学教師のひとりが弘中又一だったという以上の根拠はほとんど示されていない。また、「弘中の「ボンチ」(松山地方の方言で坊っちゃんの意)からヒントを得て『坊っちゃん』という小説名を付けたといわれる。」とも説明してあるが、秦 ([5],54頁) が根拠だろうか。さらに言えば、多くの文献で引用されているいわゆる「横地・弘中書き入れ本」([23])の最初の頁の題名「坊っちゃん」の横に「夏目自身ヲ云清ノ言葉ヨリ取レルナルベシ尚弘中ノニックデモアリシ由送別会ノ時寒川ヨリ聞ケリ」という書き込みがあるから、この文章の後半部分を根拠に弘中のニックネーム「ボンチ」を引出したのかもしれない。ところが、秦 ([5],50頁他)によると弘中の「あだ名」は「シッポクさん」であって、「ボンチ」なる呼び方を記した文献を見つけることは出来なかった。そもそも「ボンチ」なる呼称は「坊っちゃん」からなまったものであって逆ではないだろう。

また、同書26頁には『坊っちゃん』中の「清」の、本稿でいうII類の「モデル」であると思われる婆や「おます³」が大の漱石びいきで『『金さま、金さま』と下にも置かなかった」という記載があるが、この「おます」は「御家人くずれで言葉づかいのていねいな」と紹介されており、漱石の幼少期に身近で世話をしてくれた由。日本語の二人称単数の呼び方は時、場所、相手との関係によって様々に使い分けるから始終「金さま、金さま」と呼んでいたわけではあるまい、主家の男の子に対する敬称として「(お)坊っちゃん」とか「(お)坊っちゃんま」と呼んでいた可能性も考えられる。従って、「おます」が幼少の漱石に対して、小説にある通り「坊っちゃんは,,」と絶えず話しかけていたことは想像に難くない。実際、曾我 ([27],9頁)には「漱石が大分大きくなってからも坊っちゃん〜とってゐたそうである」という話を紹介している。これらを勘案すると、小説の題名は「弘中のボンチ」を待つまでもなく『坊っちゃん』で決まりだろう。

2.1-2) 近藤(英)([15])は弘中が書いた渡部政和の追想記を随所に引用しながら「坊っちゃん」弘中説を縷々説明している(114頁)。

主人公の坊っちゃんにしても、漱石自身のこともあり、僕のこともある。
夏目と僕とは毎日の出来ごとやら失策を互いに話しあって笑い興ずることが

³森田 ([20],351頁)では、本名も「清」であるとしている。

多かったので、自然二つが一緒になって一人の坊っちゃんが作り上げられているように思う。

ただ、渡部君は、夏目とあまり交際がなかったので、山嵐相手の坊っちゃんはず僕である。僕は数学と英語を担当させられたから、それぞれの主任教諭である渡部君とも夏目君とも兩人に関係なきを得なかった。

とあるが少々自己顕示が過ぎるのではないだろうか。実際、秦 ([5],48頁-49頁) に当時の教職員の名簿が載っているが、嘱託身分の夏目以外に古参の英語の教諭がおり、新任早々で教諭でもない夏目が英語科の主任だったとは信じがたい。近藤 (英) ([15],180頁) は次のような渡部政和の思い出話を引用している。

渡部先生曰く、夏目先生は英語嘱託講師として赴任せられたので、学校の俗務などには関係せられなかった。始終超然としていられた。教員室にいられる時もあまり物かずに言われなかった。

「横地・弘中の書き入れ本」 ([23]) にしても発見者の松岡 ([17],68頁-69頁) は兎も角、秦 ([5],20頁-22頁) においてさえ「書き入れ本の価値」なる小節を設けて大いに参考になっているが、当事者の個人的思い入れが強すぎる書き込み資料や回想記の資料的価値を過大に評価しているのではないだろうか。

近藤 (英) 自身がいうように ([15],173頁)

考えてみれば、小説の登場人物は、本質的には作者の頭の中で作られた架空のものであって、書かれたことが、いちいちモデルにあてはまるわけではない。とすれば、モデルとみられる人物について、とやかくいうのは、小説とは何であるかを知らないものとして、笑いの種になるかも知れない。

ということを知りながら一書をものにするならば、もう少し突っ込んだ考証がほしい。

2.1-3) 『安倍能成選集』第3巻「小宮豊隆の『夏目漱石』を読む」 ([2],191頁) には、

最も卑近な例はモデル問題であり、普通の読者は作品に向って直ちにモデルを求めようとする。「坊っちゃん」の如きは、このモデル問題で世間にセンセーションを起し、主人公坊っちゃんの性格と活動との一面に利用された或る實在の人物—この人は新聞によると近頃逝去した—の如きは、自分でそのモデルを名乗りだし、作中の自分のしないことまで自分がしたといひ、架空の話まで事實にしてしまはうとさへした。

と厳しく批判しているが、この人物とは弘中又一を指していると思われる。

1.1節でも述べたように漱石の小説に登場する人物はあくまで漱石の創作であるが、キャラクターやエピソードに関しては漱石が参考ないしヒントを得た人物は実在する可能性がある。つまり、III類に分類される「モデル」である。このように考えると、「坊っちゃん」のII類の意味での「モデル」は漱石自身であることは疑問の余地はないと思われる。実際、漱石の初期の弟子のひとりである森田 ([20],351頁-352頁) は

先生は自叙伝小説を書かない人である。こういう意味は、自分で経験したことを書かれたことがないという意味ではない。,,,(中略),,先生はすべての作を想像によって書かれた。換言すれば、先生は自己の経験をまとまった自己の経験、すなわち自己の履歴としては書かれなかったけれども、個々の材料としては盛んに作中に取り入れていられる。,,、ことに『坊っちゃん』は初期の作であるためでもあろうが、それが比較的まとまった経験として作中に織り込まれている。

といくつか例をあげて、漱石自身に関わる事実関係、体験と対応する『坊っちゃん』の作中の該当部分を指摘している。小説の登場人物に作者自身の体験や事実関係を数多く採り入れた場合、作者自身はIII類の「モデル」ではなく、II類の「モデル」と見做すべきだろう。

これ等の先行研究を勘案すると、弘中又一についてはIII類の意味で「坊っちゃん」の「モデル」の一人である可能性は考えられが、伝えられている彼のキャラクターからは「坊っちゃん」のようなインパクトが感じられない。秦([5],53頁)は半藤一利([4],18頁)を引用して「(弘中は)子持ち、長州出身の弘中を擬すのは『およそ似ても似つかない』から『坊っちゃんは結局は漱石自身とするほうがずっと自然のようである』と主張している」と述べているが⁴、他方で、同書(52頁-56頁)には、在任がわずか1年だった弘中について「松山中学で生徒たちに残した弘中の印象は淡いようである」としつつ、結局、弘中の「坊っちゃん」モデル説を否定はしていないようだ。

漱石の最初期からの弟子のひとり小宮豊隆([11],70頁)は『坊っちゃん』の登場人物の「モデル」について、「もし『坊っちゃん』にモデルがあるとすれば、そのモデルは、すべて漱石自身であったといふのが、一番正しい解釈であると思ふ」と述べている。主人公の「坊っちゃん」以外に当てはめるのは少々無理筋のように感じられるが、主人公の「坊っちゃん」に関しては一番妥当な見方だと思われる。

⁴直接半藤の文献([4])にアクセスすることができなかった。

現在の位置: ホーム > 熊谷の偉人の部屋 > 熊谷Person dictionary > 弘中又一

弘中又一 (ひろなかまたいち) (1873-1938)



弘中又一



弘中又一解説板(宮町一丁目)

教育者。夏目漱石の『坊っちゃん』主人公のモデルとなった人物。明治28年4月漱石が英語教師として愛媛県松山中学校に赴任した際、一か月遅れで、数学教師として赴任。約1年漱石と一緒に、弘中の「ボンチ」（松山地方の方言で坊っちゃんの意）からヒントを得て『坊っちゃん』という小説名を付けたといわれる。

その後、明治33年4月より大正8年5月まで熊谷中学校（現熊谷高校）教師を務める。熊谷では、市内の宮町一丁目（現在のさいたま地方裁判所熊谷支部南側）の借家に住んでいた。現在、その家は残されていないが、ブロック塀に解説板が掲げられている。

『熊谷高校八十周年誌』には、「弘中又一」のエピソードとして、「ドジョウを買ったが、入れ物が無いので、かぶっていた山高帽の中に入れて持ち帰った」「荷車を引いて歩くのに山高帽にブロックコートをはおって引いていた」等々が紹介されている。昭和13年8月6日65歳で没す。

年表

和暦	西暦	出来事
明治6年	1873	山口県湯野村（現周南市）に生まれる。
明治23年	1890	同志社大学入学
明治26年	1893	12月山口県柳井小学校高等科英語代用教員となる。 結婚。又一20歳、タカ17歳。
明治27年	1894	同志社大学卒業。
明治28年	1895	愛媛県松山中学校へ単身赴任。月俸20円。
明治29年	1896	4月愛媛県東予分校（現愛媛県立西条高等学校）に転任。 11月東予分校依願免職。徳島県第二中学校教諭となる。
明治33年	1900	埼玉県尋常中学校第二分校（旧制熊谷中学、現埼玉県立熊谷高校）に赴任。月俸45円。
明治39年	1906	夏目漱石『坊っちゃん』をホトトギス4月号に発表。翌年単行本化。
大正8年	1919	熊谷中学校を退職し、京都の同志社中学校へ赴任。
昭和13年	1938	死去。享年66歳。

[このページの先頭へ戻る](#) [ホームへ戻る](#)

図 1: 熊谷デジタルミュージアム

最初に「夏目漱石の『坊っちゃん』主人公のモデルとなった人物。」と堂々と書いてある。旧宅跡には写真のような看板が立っているらしい。

2.2 「山嵐」の「モデル」について

前述したように、「山嵐」の「モデル」については、近藤(哲)([16])と河西([8])を例外として、多くの文献が漱石の同僚であった数学教師の渡部政和であるとする([5],[6]⁵,[7],[15],[17],[27])。しかも、当の渡部政和が終生そのことを否定し続けていたこともよく知られている。しかし、その根拠とされる種々の事実や証言の類からは渡部政和が本稿でいう III 類の「モデル」に過ぎないことを示しているように思われる。実際当の本人にとって、登場人物の一部の行動や感覚が、特にネガティブな場合、当人の価値観に反して受け入れがたいと感じた時、「モデル」に擬されることに強く反発、否定するのは当然である。近藤(英)([15],7頁)によると「小説中に描かれている“山嵐”と、ご本人とは、その人間像において、あまりにも違う点が多過ぎるのである。,,, (中略),,, “山嵐”のイメージを、そのまま渡部先生にかぶせて放置するにはしのびない」ことが同書を出版した主要な動機らしい。同書([15],106頁)には「,,, 道後の宿屋に待ち伏せして人をなぐるような蛮行は、僕は断じてやらない。考える余地もない」という本人の弁を紹介している。確かに渡部は地元出身で長く同中学の教師をしており、辞表を叩きつけて東京に出奔する、という山嵐像を彼からインスパイアされたとは到底思われぬ。つまり、たかだか本稿の意味の III 類の「モデル」でしか有り得ない。

2.2-1) 曾我正堂の「坊っちゃんモデル考」([27],7頁-8頁)によると「漱石の坊っちゃんもよくモデルのことで騒がれる作品で、なかんづく山嵐の数学教師が、しばしば詮索の種子になる。,,, 中には山嵐のモデル某先生が、世界的数学者である旨が確かに書いてあった。... あのモデルは、そんな世界的な数学者ではなく、いま現に京都である中学校の教師をしてあるとってゐた⁶」

ここでいう「世界的数学者」は後に東北帝国大学初代数学教授になった林鶴一以外には考えられない。また、京都で「中学校の教師」をしている人物は熊谷中学校在職中に乞われて母校の同志社中学校の教師に転じた弘中又一の経歴と一致する([5] 55頁,[15] 134頁)。なお、彼は「木村氏は明らかにぼっちゃんのモデルと山嵐のモデルを混同されてゐる」とも述べていることから察すると、彼は弘中又一は坊っちゃんの「モデル」だと思っていることになる。

2.2-2) また、同書([27],17頁)では、漱石の『坊っちゃん』の中で山嵐の風貌を「逞しい毬栗坊主で叡山の悪僧といふべき面構へである。,,,」を引用して「この“山嵐”はその描かれてある風貌性格から渡部政和先生たること實証明白である」とも述べているが、この記述からは彼が本稿でいう III 類の「モデル」であることを主張しているに過ぎない。

2.2-3) 安倍能成の「思い出す師と友と⁷」([19],99頁-100頁)によると「中学時代には、世に『坊っちゃん』の山嵐のモデルだといわれて居る渡部政和先生の数学の授業が一番印象に残って居る」とある。

⁵「松山中学と山嵐先生」なる小節を設けており、「山嵐」と渡部先生を完全に同一視している。

⁶原文では「木村毅氏が“文壇モデル考”([9])で坊っちゃんに言及」と記して孫引きしているが、当該文献にはそのような記述は発見できなかった。思い違いではなかろうか。

⁷この文章は『現代知性全集』安倍能成集「思い出す師と友と」(229頁-236頁)の内、主に230頁-233頁からの抜粋で、(但し、一部省略あり)夏目先生については他で書いたからやめる、とある。

しかし、彼の『我が生ひ立ち 自叙傳』⁸([3],200頁)には「(中学)三年では誤って「坊っちゃん」の山嵐と伝へられて居る渡部政和先生に教はった。,, , この人は山嵐のモデルではないが、山嵐の話し振りは実にこの人の呼吸を活写して居た」とあり、晩年の安倍が必ずしも世の通説には賛同していなかった様子が伺える。

次に、「山嵐」の「モデル」は渡部政和だという通説に反してそれぞれ異なる人物をあげている近藤(哲)([16])と河西([8])についてふれる。

2.2-4) 近藤(哲)([16])は「山嵐」の出身地が会津だということに着目して、「スポーツ好きの漱石が、会津出身の弟子から同郷の天才柔道家・西郷四郎の話の間かされ、『会津っぽ』山嵐が誕生したのだとわたしは思います。(同書183頁)」と述べて、会津出身の柔道家西郷四郎が「山嵐」の本稿でいうI類またはII類の「モデル」であることを論証しようと本1冊を費やして縷々論じている。しかしながら、「スポーツ好き」の漱石は当時よく知られた柔道の技「山嵐」や明治維新後の会津人の心情を十分承知していたと思われる。つまり、特定の個人を「モデル」として思い浮かべなくても、小説『坊っちゃん』に登場する「山嵐」が会津出身で抜群の身体能力を持ち活劇(暴力)シーン等を創作することは容易だったと思われる。つまり、西郷四郎は本稿でいうIII類の「モデル」ですらないと言わざるを得ない。くどいようだが少々本文から引用して指摘しておきたい。

1) (同147頁-148頁) 小説『坊っちゃん』に「君の腕は強そうだな柔術でもやるかと聞いてみた。([22],413頁下段)」あたりの文章を引用しつつ「山嵐」は柔道家であってもおかしくありません(148頁)」と推論し、彼が会津出身だとされていることと併せて、「一世を風靡した有名な会津出身の天才柔道家がいるのです。,, , 彼の名は西郷四郎といいます」と述べているがあくまで著者の連想であって後述するように漱石が「山嵐」を登場させるために強いて特定の人物「西郷四郎」は必要とはしなかったと思われる。

2) 彼は西郷四郎と漱石を結びつけるキーパーソンの一人⁹として漱石の門下生で会津出身の皆川正禧をあげている(159頁)。彼は

正禧の故郷が二人の話題にのぼることもあったでしょうから、それが小説の材となったとしても不思議ではありません。

「山嵐投げ」で一世を風靡した柔道史上不出世の天才児・西郷四郎は正禧と同郷でありますから、漱石と正禧がそのことで話に花を咲かせたことがあってもおかしくありません。(170頁)

と想像を逞しくしている。スポーツ好きで柔道にも詳しかった漱石(173頁)であればこの推論自体をを否定することは難しい。しかし、彼は続けて

漱石にしてみれば、執筆当時会津の門下生がおり、そしてその同郷人に山嵐投げの柔道家がいるとすれば、『坊っちゃん』の正義派の熱血漢会津っぽに「山嵐」と命名したのも不自然なことではない。(170頁)

⁸この文献は高瀬正仁からご教示頂いた。記して謝意を表したい。

⁹もう一人のキーパーソンとして講道館の創設者にして柔道家西郷四郎の育ての親の嘉納治五郎をあげているが、漱石とは当時高等師範の校長をしていた嘉納に呼ばれて同校に就職するよう説得された([12],243頁)という以上の深い関係があったとは思われない。

さらに、会津藩の家訓や新渡戸稲造の『武士道』までも引用しつつ、「かつての武士道の精神がとりわけ大きな意味をもって漱石に想起されたのではないかと思うのです。(207頁)と指摘して、

その精神の典型的な体現者として会津が漱石の脳裏にあったのではないかと思うのです。これが『坊っちゃん』に会津っぽの登場する理由の一つです。(207頁)

と第三章「山嵐のモデル」を締めくくっている。しかしながら、この結論こそ正に漱石が「西郷四郎」なる特定の人物を必要とせずに会津出身の数学教師「山嵐」を描写することが可能だったということを著者自身が如実に証明しているのではないだろうか。つまり「西郷四郎」は本稿でいう III 類の「モデル」ですらないと言わざるを得ない。

次に、やはり通説に反して積極的に「山嵐」の「モデル」は漱石の成立学舎と大学予備門時代の恩師にあたる隈本有尚であるとする河西説 ([8]) について検討する。

2.2-5) 『山口大学の来た道 創基 200 周年』 ([28], 12 頁) によると、隈本は正義感が強く非常に厳格な性格であったこと等を紹介し、『坊っちゃん』の「山嵐」の「モデル」だと言われていることを述べている¹⁰。しかし、その厳格さの故か彼の学生であった正岡子規は大学予備門を卒業できずに中途退学を余儀なくされている。子規と親友であった漱石はそのことを知っていた可能性は高い。しかし、「坊っちゃん」に登場する「山嵐」は正義感と共に「坊っちゃん」に下宿を斡旋したり氷水を奢ったりと面倒見の良さも併せ持っており、少々違うのではないかというのが率直な感想である。

ところが、河西 ([8]) は「まえがき」(3 頁)において「,, 夏目漱石は、隈本を『坊っちゃん』で数学主任山嵐として描いた」と言い切り、また「漱石研究においても隈本に言及したものは一つもない。(6 頁)」と述べて山嵐=隈本説のプライオリティを主張している。実際彼は本文(第3章『坊っちゃん』の舞台裏 67 頁-107 頁)においても隈本が「山嵐」の、本稿でいう I 類のモデルであることを縷々論証しようと試みている。しかし、主題であるシュタイナーと隈本有尚を引き立たせるための方便として強引にこじつけている感が否めない。無理筋だと思われるが、「モデル」論は強く言ったもの勝ち、という傾向があるようなので本稿ではいくつか同書から引用する形でコメントしておきたい。

1) (同 53 頁)「漱石はこの熱い時代の隈本に成立学舎で数学と英語、万国史を学んだ。少年漱石の目には、生殺与奪権を握っている学部長菊池大麓に学問における真実を武器に単身戦いを挑む隈本有尚のこの姿は、強大な捕食者に対して全身の毛を針のように逆立て身を守る山嵐のように映ったことだろう」と思い入れたっぷりに予断と偏見に満ちた感想を述べている。

2) (同 70 頁) 見出し「山嵐と隈本有尚」で始まる節では、成立学舎や大学予備門時代の恩師隈本有尚と漱石の関係を『坊っちゃん』における数学主任の山嵐と新任数学教師「坊っちゃん」の関係として説明しているが、この事実を持って隈本が「山嵐」の、如何なる意味でも、「モデル」である根拠の一つであると特記するような事ではあるまい。作家の創作によってどうとでもなる関係である。

¹⁰ 出典は次に紹介する河西 ([8]) だと思われる。

3)(同 75 頁) 見出し「坊っちゃんは山口へ行った」においては、漱石が隈本有尚のいた山口に行っているはずだと 5 頁にわたって縷々説明している。実際には山口高等学校から熱心な招聘を受けたことは事実であるが、その招聘を断わって松山中学に赴任している。「この部分に隈本の真骨頂、隈本＝山嵐が表現されている。(99 頁中段)」とあるように河西は隈本を山嵐の本稿でいう I 類の意味のモデルと見做しているから、当然同僚の漱石＝坊っちゃんも山口に行って貰わないと困るだろう。しかし、もし隈本が山嵐の III 類の意味のモデルであるとするならば、漱石がどこで教鞭をとっていようが関係ないことである。

4) 河西が恐らく最も重視したのは「山口高等学校寄宿舎事件」(見出し,80 頁)と思われる。というのは小説『坊っちゃん』においても新任教師「坊っちゃん」が経験することになる「寄宿舎事件」はこの小説の見せ場の一つでもあるからである。実際河西は、見出し『坊っちゃん』と山口高等学校事件の類似点」(86 頁)とある節において縷々論じている。しかし、I 類のモデル小説と見做すならば、類似しているのは当然であって、むしろ相違点の多寡を吟味すべきであろう。

この「山口高等学校寄宿舎事件(明治 26 年)」は河西の本に於ても多くの新聞、『東京朝日新聞』、『時事新報』、『都新聞』、『読売新聞』、『東京日々新聞』、『時事新報』から記事が引用されており、当時在京していたと思われる漱石が「事件」の概要を知ることには十分可能だったと思われるから、隈本と直接の関係がなくとも小説中に取り込むことは容易であったろう。

5)(同 102 頁) 見出し「教育者隈本有尚」の冒頭から「では、この山嵐こと隈本有尚は山口でどのような教育者だったのであろうか」と述べて、彼の教育者としてのスタイルや風貌、生徒の評判等を林博太郎の回顧話を引用しながら紹介している。しかし、小説『坊っちゃん』との関係においては「坊っちゃんも『後で聞いたらこの男(山嵐)が一番生徒に人気があるのだそうだ。([17],363 頁上段)』」の部分しか引用していない(103 頁)。実際には、小説『坊っちゃん』に登場する山嵐の教育者としての風貌はもう少し詳細に描かれているのではないだろうか。

6) もう一つ問題なのは、もし「山嵐＝隈本有尚」だとするならば隈本の山口高等学校時代の隈本の数学教師ぶりを漱石はどうして知り得たのだろうか。同書(99 頁-100 頁)には「,, 漱石は熊本時代に英語授業の視察で福岡の修猷館を訪れ、隈本に会っている。授業を参観した漱石は、『西洋人使用セザル学校ニ於テ斯ノ如ク正則的ニ授業スルハ稀ニ見ル所ニシテ、従ッテ其ノ功績モ此方面ニ向ッテハ顕著ナルベキヲ信ズ。』と褒めたたえた」とあり、それとなく漱石と隈本の間を印象づけているが、隈本の、数学ではなく、英語の授業を視察したのではないだろうか。

以上、河西は縷々隈本＝山嵐説を展開しているのであるが、我田引水、強引な推論が目立ちどう鼻屑目に見ても本稿でいう III 類の「モデル」としてさえ肯首できない。

その他、「モデル」論とは離れるが少々気になるところについてコメントする。

7)(同 61 頁-68 頁) 東京数学雑誌記事、明治 12 年 4 月号の匿名の投書について、河西は筆者は隈本であると断定し、投書を敷衍して菊池大麓提出の問題と解答を誤読して批判、林が隈本を憎むようになったと述べているが根拠のない話である。彼は隈本有尚を引き立てるためか、殊更に菊池大麓を悪役にしたてあげているが誤解と誇張が過ぎるの

ではないだろうか。

8) 河西は文部省視学官隈本有尚が引き起こした有名ないわゆる「哲学館事件」について4頁ばかりを割いて紹介している(同215頁-217頁注1)が、皮肉にも時の文部大臣は彼を憎んだはずの菊池大麓である。隈本の役割は結局文部省の手先となり私学を弾圧したと解釈することも可能である。

なお、小松[14]の第10章隈本有尚と哲学館事件(356頁-387頁)にもかなり詳しい経歴が紹介してある。その経歴からもやはり彼の謹厳実直かつ強烈な個性は感じられるが、「山嵐」のような正義感と共にある面倒見の良さや中等レベルの数学教育に対する情熱は感じられない。

9) 秦郁彦([5],19頁)は河西説について、「山嵐」=隈本有尚を「坊っちゃん」=隈本有尚説だと誤ってを引用しながら、「より有力なモデルたちが松山にごろごろしている以上、借景説(小説の真の舞台は山口である)の説得力は乏しいと言わざるをえない」と批判している。

以上のような先行研究は察するに本稿でいうI類ないしII類に相当する「モデル」探しのようみえて、その実はIII類の「モデル」についてあれこれ論じているように思われる。漱石の小説『坊っちゃん』に登場する人物に、もし「モデル」がいるとするならば、解明すべきことは本稿でいうII類に相当する「モデル」は誰かということではなければならない。

2.2-6)最後に、「山嵐」の「モデル」は渡部政和であるという説を漱石自身が強く否定していることを小林([10],59頁)が引用しているから孫引きではあるが紹介しておく。

更に「僕の昔」の一節¹¹(からの引用)

『学校を出てから、伊予の松山の中学の教師に暫く行った。,,, (中略),,,
もう一つ困るのは、松山の中学にあの小説の中の山嵐といふ綽名のついた教師と、寸分違はぬのがあるといふので、漱石はあの男のことをかいたんだといはれてゐる事だ。決してそんなつもりぢやないのだから閉口した。』

¹¹夏目漱石編『過去の回想』、しみじみ朗読文庫編(2013)の中の一節「僕の昔」のことと思われるがアクセス出来なかった。

3 林鶴一と夏目漱石の経歴上の接点と類似点

表 1: 林鶴一と漱石の略歴

	林 鶴一 (1873–1935)	夏目漱石 (1867–1916)	関連事項
1867(慶應3)		夏目直克の五男として江戸で生れる	
1873(M6).6	徳島の小学教員の家に生れる		
1888(M16)		成立学舎に入学, 隈本有尚に教わる	
1893(M26).7		帝国大学卒業	
.10		高等師範学校の英語教師となる	
1894(M27).7			日清戦争 (~M28.4)
1895(M28).4		松山中学校嘱託	
1896(M29).4		第五高等学校 (熊本) 講師	
1897(M30).7	帝国大学数学科を卒業		
.7	高等師範学校講師		
1898(M31).8	新設の京都帝国大学理工科大学助教授		
1899(M32).4	依願退職 [29]		
.6	松山中学校嘱託		
1900(M33).5		英国留学*1)(36.1 帰国)	
1901(M34)	東京高等師範学校講師		
1902(M35).9			安倍能成上京 正岡子規死去
1903(M36).4		第一高等学校講師	
1904(M37).2			日露戦争 (~M38.9)
1906(M39).4		「坊っちゃん」をホトトギスに発表	
1907(M40).4		教職を辞し朝日新聞社に入社	
1911(M44).4	東北帝国大学数学科教授		
1916(T5).12		死去 (享年 49)	
1935(S10).10	死去 (享年 62)		

*1) 横浜出立は9月8日 ([21],334頁)

夏目漱石の経歴については [12],[20],[21] を参照した。

林鶴一の経歴については [23],[29],[32],[33] を参照した。

林と漱石を対比して経歴表を眺めると、林と漱石の共通点は共に通常の常識では考えられない格下の松山中学校に自ら望んで教師として赴任していることである。かつ、後述するように漱石は林のそのような経歴を知っていたと思われる。

漱石は明治26(1893)年帝国大学を卒業後、高等師範に奉職し、順調に学者の道を歩みだしたにも拘わらず山口高等学校からの招聘を断り「何を苦しんで、自分の生れ故郷である東京を捨てて、何もかも捨てる気になって、松山のような、四国の果ての一中学

の教師として赴任する気になったのであるか。,,, (中略),,, 普通に考えれば, どうしても不思議である¹²。(小宮 [12],269 頁)」

他方, 林については東北帝国大学の初代数学科教授として後輩の藤原松三郎と共に赴任した後の活躍は良く知られているが ([23],232 頁-234 頁), 彼が京都帝国大学に初代専任助教授 ([34]) として赴任していたことはあまり知られていない。ましてや, 彼が着任後わずか 1 年足らずで依願退職 ([29]) して浪人したことは京大関係者にすら殆ど知られていない。辞職に至った理由について, 彼に引き立てられて新設の東北帝国大学で助手を務めた小倉金之助の回想録 ([24],52 頁) によると「,,, 京都大学に新設の, 理工科の助教授として一ヵ年おりました。しかしある理由のために一どうい理由であったのか, 私も確かなことは知りません一ヵ年で止めまして松山中学の嘱託になりました」と述べている。「ある事情」ではなく「ある理由」と述べているところに微妙なニュアンスの違いを感じるのである。察するに, 例えば家庭の事情ということではない何らかのはっきりした理由があったと思われる。

4 林鶴一と「山嵐」

4.1 林鶴一の性格

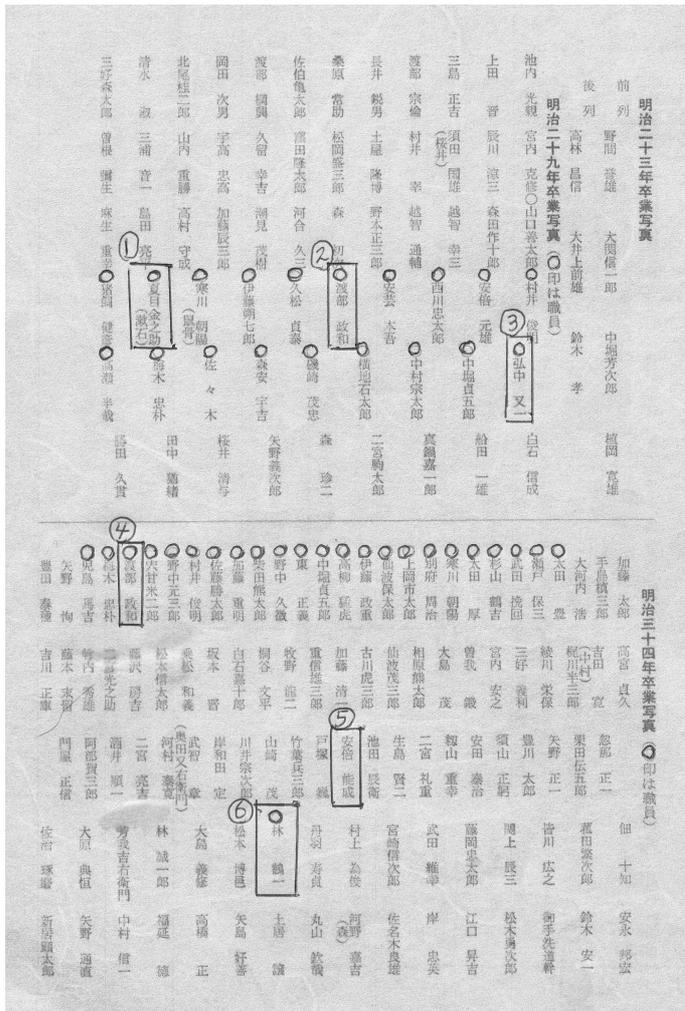
4.1-1) 京都帝国大学に続く 3 番目の帝国大学として創設されたばかりの東北帝国大学に林と共に着任した, 林の後輩にあたる藤原松三郎によると「林鶴一には, 大きな数学上の研究業績は見られないが, 激しい情熱で東北大学の数学教室を建設した功績は大きい。その個性については, 毀誉褒貶もあるが, 若い研究者たちには稀にみる親切さを持って接した。教育行政上にも大きな影響を残した (『日本の数学 100 年史』(上)([23],234 頁, 原典は Tohoku Math. J.,vol.41,1935,pp.265-289. 英文)」とある。

4.1-2) 小倉金之助 ([24],52 頁, 上下段) によると, 「(林先生の) 第一印象として先生から受けたものは,,, 老大家いわゆる秀才型の学者たちとは, まるで違うということです。先生は元気のいい快活な男性的な方であって, 大胆に学界の批判もやるし, また企画性に富んだ方のようにも感じられました」

4.1-3) 明治 34 年松山中学の卒業写真次頁図 2([19]) を見ると, 他の教員が全員最後列に並んでいる中で林鶴一ただひとり教員であるにも拘わらず卒業生の真っただ中にいる。自分は他の教員とは違う, という意識なのか, 何れにしる林が松山中学校時代に特異なキャラクターの持ち主だったことが垣間見える。

4.1-4) 林は松山中学赴任以前にすでに数学の教科書と思われる「幾何學」([30]), 「算術教科書」([31]) を執筆しており, 中学生に数学を教えることに対する抵抗感は無かったと思われる。

¹² 秦 ([5],17 頁) によると漱石が「都落ち」した理由として五説ある由。



上段：明治29年卒業写真

(1) 夏目金之助 (漱石)

(2) 渡部 政和

(3) 弘中 又一

○は教職員

下段：明治34年卒業写真

(4) 渡部 政和

(5) 安倍 能成 (卒業生)

(6) 林 鶴一

○は教職員

図 2: 松山中学明治29年と明治34年の卒業写真中の人物 ([19])

4.2 「山嵐」の経歴と性格

以下、『坊っちゃん』([22])から引用する。

4.2-1) (361頁上段)「夫からおれと同じ数学の教師に堀田と云ふのが居た。是は逞しい毬栗坊主で、叡山の悪僧と云ふべき面構えである」

4.2-2) (363頁上段)「歸りに山嵐は通町で氷水を一杯奢った。,,,こんなに色々世話をしてくれる所を見ると、わるい男でもなささうだ。只おれと同じ様にせっかちで痛癢持らしい。あとで聞いたら此男が一番生徒に人望があるのださうだ。」

4.2-3) (391頁下段-392頁上段)「すると今迄だまって聞いて居た山嵐が憤然として、起ち上がった。,,,『私は教頭及び其他諸君の御説には全然不同意であります。,,,教育の精神は單に學問を授ける許りではない、高尚な、正直な、武士的な元氣を鼓吹すると同時に、,,,』と云ひながら、どんと腰を卸した」とあり、正義感と共に教育にも識見を持っていたことが伺える。

その他、「坊っちゃん」の下宿の斡旋をしたりして坊っちゃんをして「こんなに色々世話をしてくれる所をみると、悪い男でもなささうだ。([22],363頁上段)」と言わしめているから面倒見の良さも併せ持っていた様子も伺える。

4.3 夏目漱石の性格

漱石の妻、鏡子夫人の「漱石の思い出」([21],386頁)によると「一体、夏目は涙もろい質で、人の気の毒な話などにはすぐに同情してしまう方でしたし、また頼まれれば欲得を離れて、かなり骨折って何かと面倒を見る質の人でした。,,,(中略),,, 元来ずいぶんと情深い情味の厚い人だったように思われます。それに何よりも人との関係で気のつくのは、恐ろしく几帳面なことをございました。だから約束なんかは本当に堅いものでした。その代り人がそれを破ったりするようなことがあると、一ぺんにその人に対する信用をなくするというような傾きもありました」とある。

小説『坊っちゃん』の主人公「坊っちゃん」と山嵐の関係で「坊っちゃん」の「山嵐」に対する感情描写に思い当たるところが多々あるように思われる。例えば、「坊っちゃん」は山嵐から奢って貰った氷水の代金1銭5厘をちょっとしたきっかけで何が何でも返そうとする。

こゝへ来た時第一番に氷水を奢ったのは山嵐だ。そんな裏表のある奴から、氷水でも奢ってもらっちゃ、おれの顔に關はる。おれはたった一杯しか飲まなかったから一銭五厘しか拂はしぢゃない。しかし一銭だらうが五厘だらうが、詐欺師の恩になつては、死ぬ迄心持ちがよくない。あした學校へ行ったら、一銭五厘返して置かう。([22],384頁上下段)

というあたりによく漱石自身の性格が反映されているように感じられる。

5 漱石が林のことを知っていた可能性について

いかに林鶴一の経歴や松山中学時代の様子が「山嵐」に似ているからといって漱石自身がそのことを知っていなければ、主人公「坊っちゃん」とコンビを組む重要な脇役「山嵐」のアイデアを得ることは出来ない。では、林と漱石の接点はどこにあるのだろうか。そのキーパーソンこそ松山出身の安倍能成(1883-1966)である。

5.1 林鶴一：安倍能成：夏目漱石

松山に生れた安倍は松山中学入学1年前に漱石が教師として同中学に赴任、5年生の時に林鶴一に数学と物理を習っている([3],201頁)。同中学卒業後、さらに同校で1年間助教諭心得を勤めてから上京して、第一高等学校、東京帝国大学で漱石に教わり、かつ文芸活動等を通じてその後、終生漱石と親しく交わった。漱石が小説『坊っちゃん』を

書き上げた明治39年前後、安倍は大学1年生だった。その前後に安倍は漱石と親交を深めたようだ。安倍が松山出身であることを考慮すると、漱石が安倍から松山中学時代に印象に残った教師として林の話を経験的に聞いた可能性はあると考えられる。ただ、文献上で正確に確認することは出来なかった。安倍は明治35年9月に第一高等学校に入学すべく上京するが同じ月に子規が亡くなっている(安倍能成選集第1巻([1],157頁)。この時漱石はイギリス滞在中である。同書「私と俳句」の章(159頁-160頁)には「謡といへば漱石は、松山時代にその風貌を慕って時々その姿を瞥見した外には、高等學校で一學期ジョンソンの『ラセラス傳』を教はった時、教室で言葉をかはしただけであり、文名が一時に高くなってからも私は接触の機会を得なかった。初めて漱石と親しく座を交へて語ったのは、やはり謡會の席であった」とあり、漱石が小説『坊っちゃん』を発表した明治39年4月前後の頃と思われるのでこの回想録から決定的結論はだせそうにない。

2.2-2)でも述べたように、安倍能成の自叙伝([3],200頁)には「(数学は)三年では誤って『坊っちゃん』の山嵐と伝えられて居る渡部政和先生に教はった」「この人は山嵐のモデルではないが、山嵐の話し振りは実にこの人の呼吸を活写して居た」とあり、同,201頁にも「五年の時偶々京都帝国大学の助教授を何かの事情によってやめた林鶴一先生が、囑託になって来られ,,代数学と物理学を先生から習った」とあり、何か理由はあったが具体的には分からない、と述べているから兎に角「わけあり教師」として松山中学校時代から知られていたことは確かなようだ。従って松山を離れた後も正岡子規と俳句関係で松山の事情に通じていたと思われる漱石の知る所となった可能性は大きいと思われる。

ここで気になるのは、安倍晩年の自伝で「誤って『坊っちゃん』の山嵐と伝えられる,,」と述べて、「山嵐」渡部政和モデル説を経験的に否定していることである。彼は何らかの情報、例えば師である漱石との対話を通じて得た知識に基づいて述べている可能性は考えられるだろう(cf. 2.2-3)。また、2.1-3)節で紹介したように、彼は「坊っちゃん」弘中又一モデル説には嫌悪感さえ匂わせている。

2-2)節でも引用した彼の回想記、「思い出す師と友と」([19],100頁)によると「此等諸先生の中で一番親しくして頂いたのは林先生である。それは私が中学卒業後続いて一年間、学校の助教諭心得というものを勤めて、卒業後も先生との接触が多かったからでもある。先生は間もなく東京高等師範の教授に転任されて、殷賑な神楽坂通りの裏に、在京中ずっと住んで居られた。私は高等学校から大学時代、よく先生のお宅を訪うては御馳走になった」とあるから、漱石は安倍から林のキャラクターについての情報を知り得る立場にあったと思われる。小説だからその情報が真実であるかどうかを問う必要はない。II類の「モデル」であるかどうかは、あくまで作者の頭の中を推理する話ではあるが、要は、その情報からインスパイアされて「山嵐」なる人物像を創造することの可能性を説得力を持って説明できるか、ということである。

6 私の結論

以上、縷々先行研究や文献を批判的に紹介してきたが、いずれも本稿でいうI類ないしII類の「モデル」のつもりで論じているように思われる。しかし、「坊っちゃん」の

「モデル」はII類の「モデル」の意味で漱石自身以外にはあり得ないと思われる。弘中又一についてはご本人が主張するほどには漱石に影響を及ぼしたとは考えにくい。つまり、III類の意味の「モデル」であるかどうかさえ疑わしい。

一方、「山嵐」のII類の「モデル」として、松山中学への赴任の経緯あるいは噂に聞く林の性格等を知って漱石が最もインスパイアされたのは林鶴一ではないだろうか。「山嵐」という準主役級¹³の人物が登場する小説『坊っちゃん』が10日ばかりという極短期間に一気に書き上げられたことも併せて考慮すると、『坊っちゃん』の青春痛快物語としての基本構想はかつての同僚、恩師のように以前から知っていた人物たちを参考にしたのではなく、恐らくきっかけは安倍能成や雑誌「ホトトギス」の編集者にして地元出身で松山中学の卒業生でもある高浜虚子¹⁴等の情報に基づいて一気に「山嵐」を中心とした粗筋のアイデアが浮かんだのではないだろうか。渡部政和については風貌、性格等「山嵐」を想起させる人物だったという証言があり、漱石と親しく交わった形跡はないが、たとえば、職員会議の様子等学校内で見聞きした彼の行動、キャラクターの一部をIII類の「モデル」として小説中に取り込んだ可能性は否定できない。

まとめると、「坊っちゃん」のII類の意味の「モデル」は漱石自身であり、「山嵐」の「モデル」については、西郷四郎や隈本有尚は論外として、II類の意味の「モデル」は林鶴一であり、III類の意味の「モデル」として渡部政和からの豊富な材料提供によって名作『坊っちゃん』が生れたと考えられるのである。

補足: 漱石文学の「モデル」、なかんずく小説『坊っちゃん』の「モデル」については過去に極めて多数の論者が種々論じているが、多くは文学者、文芸評論家、あるいは松山中学の卒業生であって、教育界関係者があまり見当たらない。しかし、官界に身を置くいわゆる宮仕えの身にとっての最大の関心事の一つが人事の話である。特に人事異動に関して、抜擢か、順当かはたまた左遷であるかの共通の基準が存在する。教員についていえば、特に国公立学校の教員人事は小、中、高、大と学校の格が上がるにつれて異動は本人の意向が尊重される。その際、本人の意識あるいはポストをオファーする側の認識として移動は原則としてより格上のポストが対象である¹⁵。以上のことを考慮すると、漱石自身が東京高等師範の職を投げ打ち、ほぼ同格の山口高校からのオファーも断り、親友菅虎雄から勧められたからとはいえ何故、これ等の上級学校より明白に格下の田舎の中学校の職を受けたのか、という通常有り得ない人事異動について、小宮 ([12], 272頁-275頁) は当時漱石が子規宛てに送った漢詩を読み解いて漱石の当時の気持ちを種々推察しているが、類似の経緯から格下の松山中学校に赴任した林鶴一を通じて「山嵐」という人物像の着想を得たことの可能性について論じた先行研究はないように思われる。松山中学の卒業生である景浦 ([7], 336頁) によると、当時の松山中学校の住田校長が「学校の刷新」を図るために「優良な教師を迎えることが第一」と考えて各方面に依頼し、結局菅虎雄が漱石に話をもち込んだ由。現に東京高等師範に在職している漱石にいくら

¹³ 秦 ([5], 56頁) は「小説『坊っちゃん』の主人公は坊っちゃんに違いないが、読み方では山嵐の方が主役ではあるまいか、と思えなくもない」と述べて「山嵐」の役割を重要視している。

¹⁴ 彼は漱石の依頼により元原稿に手を加えている由 ([26])。漱石と虚子が親密な関係にあったことを思わせる。

¹⁵ 特に近年理工系では研究環境の良し悪しが優先されることはある。しかし、本稿の焦点は明治・大正時代である。

先方が校長より高額な給料を提示したとはいえ明確に格下のポストを提示できたのは彼が漱石の親友で漱石の当時の気持ちを忖度することが出来たからだと思われる。

翻って林鶴一についても同じ事情がある。3節で紹介したように林鶴一は僅か10カ月ばかりで新設の京都帝国大学助教授の地位を依願退職、2ヶ月浪人した後遥かに格下の田舎の中学校に赴任して熱心に教育に取り組んでいる。なお、彼の辞任の理由については現在に至るまで解明されていない。松山中学赴任の経緯については、同中学住田校長の後任である横地校長も前任者の方針を引き継いで「数学者として令名のあった林鶴一理学士を招聘した。(同書, 340頁)」とあるが、林が浪人中であることを知ってポストをオファーしたと思われる。身に覚えのある漱石が林の経歴と人柄について間接的にしる耳にすれば大いに興味を掻き立てられたはずである。「山嵐」の骨格がインスパイアされても不思議ではないと思われるのである。

以上

参考文献

- [1] 安倍 能成: 1948. 『安倍能成選集』第1巻, 小山書店. (*)
<https://dl.ndl.go.jp/pid/3035193>
- [2] ———: 1949. 『安倍能成選集』第3巻, 小山書店. (*)
<https://dl.ndl.go.jp/pid/3021963>
- [3] ———: 1966. 『我が生ひ立ち 自叙傳』, 岩波書店. (*)
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2985895/1/3>
- [4] 半藤 一利: 1996. 『漱石先生ぞな, もし』, 文春文庫.
- [5] 秦 郁彦: 2004. 『漱石文学のモデルたち』, 講談社.
- [6] 今井 嘉幸: 1977. 『今井嘉幸自叙伝五十年の夢』, 神戸学術出版. (*)
<https://dl.ndl.go.jp/pid/12257982/1/2>
- [7] 景浦 直孝: 1961. 『伊豫史論考』. 非売品. (*)
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2998216/1/1>
- [8] 河西 善治: 2000. 『『坊っちゃん』とシュタイナー: 隈本有尚とその時代』, ぱる出版.
- [9] 木村 毅: 1997. 『文芸東西南北』, 東洋文庫 625, 平凡社.
- [10] 小林 孚俊: 1955. 『漱石と坊っちゃん』. 非売品. (*)
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1348142/1/13>
- [11] 小宮 豊隆: 1942. 『漱石の藝術』, 岩波書店. (*)

- <https://dl.ndl.go.jp/pid/1078598/1/2>
- [12] —————: 1949. 『夏目漱石』, 岩波書店. (*)
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1704731/1/138>
- [13] 小松 醇郎編: 1983. 『日本の数学 100 年史』上, 日本の数学 100 年史編集委員会, 岩波書店.
- [14] 小松 醇郎: 1991. 『幕末・明治初期数学者群像 (下) 明治初期編』, 吉岡書店.
- [15] 近藤 英雄: 1983. 『坊っちゃん秘話』, 青葉図書. (*)
<https://dl.ndl.go.jp/pid/12463696/1/1>
- [16] 近藤 哲: 1995. 『漱石と會津っぼ・山嵐』, 歴史春秋出版.
- [17] 松岡 議: 1967. 『ああ漱石山房』, 朝日新聞社. (*)
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1348353>
- [18] 松本 清張: 1973. 『小説東京帝国大学』, 松本清張全集 21, 文芸春秋.
- [19] 松山東高等学校八十周年記念誌: 1960. (*)
<https://dl.ndl.go.jp/pid/9581179/1/10>
- [20] 森田 草平: 1980. 『夏目漱石』(一), 講談社学術文庫 501, 講談社.
- [21] 夏目 鏡子: 1963. 「漱石の思い出」. 『世界の人間像』13, 角川書店, 283–425.
- [22] 夏目 漱石: 1950/1906. 「坊っちゃん」. 『漱石全集』上巻, 新潮社, 349–438.
- [23] 新垣 宏一: 1982. 横地・弘中書き入れ本『坊っちゃん』について. 四国女子大学紀要. 第2巻第1号通巻31集. (*)
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1798175/1/125>
- [24] 小倉 金之助: 1967. 『一数学者の回想』, 筑摩書房. (*)
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2983894/1/121>
- [25] 尾崎 護: 1998. 『低き声にて語れ—元老院議官 神田孝平』, 新潮社.
- [26] 佐藤 栄作: 2000. 「『坊っちゃん』原稿への虚子の手入れについて」, 『愛媛国文と教育』第33号, 8–18. (*)
<https://dl.ndl.go.jp/pid/4435965/1/6>
- [27] 曾我 正堂: 1937. 『伊豫の松山と俳聖子規と文豪漱石』, 三好文成堂. (*)
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1094622/1/2>

- [28] 山口大学附属図書館編: 2011. 「山口中学校から県内初の高校創立へ」. 『山口大学の来た道 創基 200 周年』 2, 12-13.

https://www.yamaguchi-u.ac.jp/wp-content/uploads/2022/01/2-2_2.pdf
資料:

- [29] 官報: 1899.04.22. .308 頁. (*)

- [30] 官報: 1899.05.16. 8. 頁 (*)

- [31] 官報: 1899.10.27. 4 頁. (*)

- [32] 京都大学 100 年史. 総説編, 年表, 大学 HP.

- [33] 京都大学理学部沿革, 大学 HP.

- [34] 京都大学文書館「京都大学歴代総長・教授・助教授経歴検索システム, 大学 HP.

- [35] 熊谷デジタルミュージアム

<https://www.kumagaya-bunkazai.jp/museum/ijin/hironakamataiti.htm>

- [36] 「熊谷市公連だより」, 第 15 号 (平成 25 年).

<https://www.city.kumagaya.lg.jp/about/soshiki/kyoiku/kumagayatyuokominkan/index.files/mataiti.pdf>

(*): 国立国会国会図書館デジタルコレクションで公開されている資料.